

子宮頸がんワクチン接種勧奨中止—本当に必要なワクチンとは？—

4月から予防接種法に基づく定期接種が始まった子宮頸がんワクチンについて、厚生労働省の専門家検討会は14日、接種後に体に痛みを訴える中高生らが相次いでいることを受け、積極的に接種を勧めることを一時差し控えることを決めました。定期接種自体は中止せず、原因や症例の発生頻度を詳しく調べる方針です。

子宮頸がんワクチン(ヒトパピローマウイルスワクチン；以下 HPV ワクチン) は販売開始から今年3月末までに推計328万人が接種しています。検討会には全身や体の広範囲が痛む症例が43例報告され、うち11例は未回復でした。日本より先に接種が始まった海外で、重篤な体の痛みを訴える副作用が計108例あることも報告されました。定期接種は継続するが、積極的な推奨はしないという、一見矛盾した対応に、接種をおこなう医療機関や接種を予定している人たちに混乱を生じるのは必至の状態です。

この HPV ワクチンの接種勧奨を控えるという判断はきわめて妥当だと考えます。

その理由として、

①ヒトパピローマウイルスはセックスで初めて感染するウイルスであるため、安易に HPV ワクチンをうって安心するよりは、適切な性教育をするほうが大切で、また、セックスデビューさえ先延ばしにすれば安全性が不明なワクチンをあわてて接種する必要がない。

②HPV ワクチンが子宮頸癌を減らすかどうかはまだ期待されているレベルであって、臨床研究での確かな証拠はない。

③子宮頸がんの発症、予防に関して、HPV ワクチンより子宮頸がん検診というより確実な方法が存在する。しかも日本ではその受診率が低い。

④HPV ワクチンは副作用の頻度が高く、症状も重篤な可能性がある。

の4点です。

HPV ワクチンの副作用の頻度ですが、厚生労働省の資料によると、インフルエンザワクチンの接種によって重篤な副作用を生じる確率はおよそ100万人に2.2人とされますが、子宮頸がんワクチンの場合、その確率は、サーバリックスでは100万人に114.7人、ガーダシルでは52.6人と明らかに頻度が高いことがわかります。ワクチンの副作用の機序や正確な頻度はよく解らないことが多いのですが、HPV ワクチンは副作用発生頻度が高いように思われます。しかも、重篤な副作用の報告が相次いでいます。全身に力が入らなくなる難病のギラン・バレー症候群や、全身のさまざまな臓器に炎症が起こる全身性エリテマトーデス、脳の障害である急性散在性脳脊髄炎などです。

ワクチンの接種にあたっては医学的必要性の観点と医療経済的観点での検討が必要となります。対象となる疾患がどれだけ多くの人に感染し、それによってどれだけ重篤化するかという疾病負担の検討をまず行い、ワクチンが開発され安全性・有効性が確認されます。そのワクチンを接種することにより医療経済的に損か得かを評価され、公費負担にするか、定期接種にするかなどを決定します。本来これらの議論は学問的な専門家と経済的専門家が別々な立場で意見を出し合うべきですが、日本ではしばしば政治的判断が優先され、十

分な議論がなされないままに決定されることがあるといわれています¹⁾。

HPV ワクチンも積極的な接種を勧めることを控えるというよりも、むしろ接種を一旦中止し、再度、ワクチンとしての有用性から再検討する必要があると思われます。

一方、日本では医療経済的効果が否定されており、接種の補助がない B 型肝炎ワクチンはどうでしょうか？。

B 型肝炎ウイルス（以下 HBV）は近年、キャリアの父親から 10% の確率で子供へ感染すること、保育所での集団感染などの事例から、唾液、汗、涙などの体液からも感染することがわかってきており、実際、高ウイルス血症の患者ではこれらの体液からほぼ 100% にウイルスが証明されています。また性感染症で蔓延しつつある遺伝子型 A 型の HBV は臨床症状が軽微で、10% の確率でキャリア化するため自分で気づかずに感染を広げる可能性があり、現在、日本で新規に発生している HBV 感染症の約半分をしめると推測されています。また HBV は一旦感染すると生涯、肝臓に潜んでおり免疫抑制剤などで再活性化する de novo 肝炎が問題となっております。また、近年、de novo 肝炎をおこした祖母より、2 人の孫に体液感染した例も報告されており、従来の HBV 感染症とは異なった感染経路が明らかになりつつあります²⁾。

先進国で HBV ワクチンが定期接種化されていないのは日本のみです。こういう問題は医学の専門家が政治に直接訴えていかねば解決されず、また正しい医療が政治決定に反映されるような仕組みが必要であろうと思われます。

平成 25 年 7 月 1 日

参考文献

- 1) 庵原 俊昭：「日本で本当に必要なワクチンは何か」という視点を . 日本医事新報 2012 ; 4604 : 14 - 17 .
- 2) 藤澤 知雄：B 型肝炎ワクチン . 現状に合わせた予防体制の整備が急務 . Medical tribune special issue 2013 ; si - 5 .